2026年度 第6回（11月）北辰テスト対策 予想問題　解答・解説

国語

1　問1（4点）

ウ

①の直前に根拠がある。転校を打ち明けても大地は「ふうん。」と言っただけで、その後の一週間、「ぼくの転校については一言もふれなかった」。転校の話題を避け続ける大地の態度を見て、「ぼく」は、大地が自分との別れを何とも思っていないのではないかと感じ、さびしく思っている。

・ア「早く転校したい」は本文にない
・イ 打ち明けたことを後悔したり、謝ろうとしたりする描写はない
・ウ 大地が転校の話題にふれないこと→別れを何とも思っていないのではというさびしさ、が本文と一致→正答
・エ 先生に知らせる話は本文にない

採点ポイント: 「一言もふれなかった」大地の態度が、「ぼく」には「どうでもいい」と言われているように感じられた、というつながりをとらえられているか。

1　問2（4点）

エ

大地がポケットから出したのは、「どれも手のひらにぴったり収まる、薄くて丸い石」だった。②は、そのような石が簡単には見つからないことを述べており、大地が「ぼく」と水切りをするために、前もって時間をかけて石を探し集めていたことが読み取れる。最後の日のために準備していたことは、「これは、投げないでとっておいたんだ」という言葉からもわかる。

・ア 河原の石が少なくなったという内容は本文にない
・イ 石を店で買ったという内容は本文にない
・ウ「ぼく」に石を使わせないようにする様子はない（最後には一番よい石を「ぼく」に渡している）
・エ が正答

採点ポイント: 「なかなか見つからない」石が「いくつも」そろっていることから、大地がかけた時間と、この日にこめた思いを読み取れているか。

1　問3（4点）

言葉を探していた

③のあとの段落に「どうでもいいどころではなかったのだ。大地は大地で、この一週間、ずっと言葉を探していたのだ」とある。まとめの文の「どうでもいい」「この一週間、ずっと」と同じ言葉の続きを探す。

・「言葉を探していた」（八字）が正答

採点ポイント: 空欄の前後（「この一週間、ずっと」「のだ」）と本文を照らし合わせて抜き出せているか。「ずっと言葉を探していた」（十一字）など、字数の合わないものは不正解。

1　問4（6点）

(例) 別れても水切りの記録を知らせてもらえるよう、一番よい石を残してくれた（34字）

正答例:

・(例1) 別れても水切りの記録を知らせてもらえるよう、一番よい石を残してくれた（34字）

・(例2) 別れのあとも、新しい町で水切りの記録を知らせてほしいと願っている（32字）

根拠: 大地は「今まで投げたどれよりも薄く、きれいな形」の石を「投げないでとっておいた」と言って渡し、「向こうにも川くらいあるだろ。そこで投げて、記録を更新したら、知らせてくれよ」と頼んでいる。離れてからも水切りを通してつながっていたいという大地の思いを、「ぼく」は石とともに受け取っている。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「別れ」が使えている	1点	指定語必須
②「記録」が使えている	1点	指定語必須
③ 離れた町でも水切りをして記録を知らせてほしい（つながっていたい）という内容	2点	「離れても連絡を取り合いたい」等も可
④ 一番よい石をとっておいて渡してくれた、という内容	1点	③で大地の願いが十分に書けていれば可
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

1　問5（5点）

イ

「知らない景色」は、これから暮らす新しい町への不安を表している。その不安が、大地から受け取った石にふれるたびに「少しだけこわくなくなる」のは、石が大地とのつながりや、「記録を更新したら、知らせてくれよ」という約束を思い出させるからである。

・ア「不安がすっかりなくなり」は、「少しだけ」と合わない

・イ が正答

・ウ 大地の記録を抜くことを目標にしている描写はない（記録は「ぼく」のほうが上）

・エ 転校を取りやめたいと考えている描写はない

採点ポイント: 「少しだけ」という程度の表現に注意し、不安が消えたのではなく、大地とのつながりを感じることでやわらいでいる、ととらえられているか。

1　問6（5点）

イ・エ

・ア: 大地の会話文（「陸、ちょっと土手に寄っていかないか。」など）が多く用いられている→不適切

・イ: 本文は「ぼく」が語り手であり（「ぼくは、大地の横顔を見た」など）、大地の気持ちは、言葉や「頬が、少しこわばっていた」などの様子を通して描かれている→適切

・ウ: 物語は、転校を打ち明けてからの一週間と最後の登校日の場面から始まり、電車の場面は最後に置かれている。電車の場面から回想する構成ではない→不適切

・エ: 「投げるたびに大地の肩には力が入り、石は水面に突きささるように沈んでいく」は、言いたいことを言い出せない大地の緊張と重なっている→適切

・オ: 時期は十一月であり、春の明るさを描いているのではない→不適切

採点ポイント: イ・エの二つを両方選んで正答（5点）。一つだけ、または三つ以上は0点。

2　問1(1)（2点）

かんわ

緩和＝きびしさや激しさをやわらげること。
採点ポイント:「かんわ」以外の読みは不正解。「えんわ」は誤り（「緩」は「暖」「援」とは別の字）。

2　問1(2)（2点）

たずさ（えて）

携える＝手に持ったり身につけたりして持っていく。
採点ポイント:「たずさ」が書けていれば正解。送りがなを含めて「たずさえて」と書いても可。音読みの「けい」は不正解。

2　問1(3)（2点）

傾向

傾向＝物事の性質や動きが、ある方向にかたむくこと。
採点ポイント:「傾」の右側は「頃」。「傾行」「系向」などの誤りに注意。

2　問1(4)（2点）

装（う）

装う＝うわべをとりつくろって、そのように見せかける。身なりを整えるという意味もある。
採点ポイント:「装」は「壮」＋「衣」の組み立て。「衣」の部分を「示」などにしない。

2　問2(1)（2点）

エ

「新しい制度をドウニュウする」＝導入（導）。ア道路（道）／イ運動（動）／ウ銅貨（銅）／エ指導（導）✓。すべて「ドウ」と読むが、「導入」と同じ漢字を含むのはエのみ。
採点ポイント:「みちびく」という意味の「導」を、同じ音の「道」「動」「銅」と区別できるか。

2　問2(2)（2点）

ウ

「人口がゲンショウする」＝減少（減）。ア現実（現）／イ厳重（厳）／ウ減量（減）✓／エ原則（原）。すべて「ゲン」と読むが、「減少」と同じ漢字を含むのはウのみ。
採点ポイント:「へる・へらす」という意味から「減」を選べるか。

2　問3（3点）

六

単語に区切ると、姉（名詞）／は（助詞）／近所（名詞）／の（助詞）／店（名詞）／で（助詞）／新しい（形容詞）／靴（名詞）／を（助詞）／買っ（動詞）／た（助動詞）／そうだ（助動詞）となる。
・付属語（それだけでは文節をつくれない、助詞・助動詞）は「は」「の」「で」「を」「た」「そうだ」の六つ。
・自立語は「姉」「近所」「店」「新しい」「靴」「買っ」の六つ。
採点ポイント: 文節（姉は／近所の／店で／新しい／靴を／買ったそうだ）に分けてから、各文節の二つ目以降の単語が付属語になることを使って数えられているか。「買った」の「た」、伝聞の「そうだ」を落とさない（伝聞の「そうだ」は1語の助動詞として数える）。

2　問4（3点）

イ

補助の関係は、あとの文節が本来の意味をうすめて、前の文節に意味をそえる関係（「〜て（で）いる」「〜て（で）ある」「〜てみる」「〜てしまう」など）。

・ア「本が―ある」:「ある」は「存在する」という本来の意味で使われており、「何が―どうする」の主語・述語の関係

・イ「書いて―ある」:「ある」は「存在する」という意味ではなく、「書いて」に「その状態が続いている」という意味をそえている→補助の関係 ✓

・ウ「手紙を―書く」:「何を」とくわしくしている連用修飾の関係

・エ「白くて―やわらかい」: 二つの文節が対等に並ぶ並立の関係

採点ポイント: 同じ「ある」でも、ア（本来の意味）とイ（補助的な意味）を見分けられているか。「〜て（で）」の直後に続く「ある」「いる」は補助の関係になることが多い。

2　問5（3点）

ウ

・ア 拡大―縮小：大きくする⇔小さくする（対義語）

・イ 安全―危険：あぶなくない⇔あぶない（対義語）

・ウ 永遠―永久：どちらも「いつまでも限りなく続くこと」（類義語）✓

・エ 義務―権利：しなければならないこと⇔してよいこと・求めることができること（対義語）

ア・イ・エは意味が反対の対義語の組、ウだけが意味の似た類義語の組である。

採点ポイント: 漢字の形（「永」が共通）ではなく、意味が反対か似ているかで判断できているか。

2　問6（3点）

エ

国語辞典の見出し語は、次の順で並んでいる。

(1) まず五十音順。四つとも清音・直音に直すと「きよう」「きよう」「きよう」「きよい」となり、三字目を比べて「い」が「う」より先なので、④きよい が一番先。

(2) 五十音で同じなら、直音（よ）が先、拗音（ょ）があと→③きよう が ①きょう より先。

(3) 清音が先、濁音があと→①きょう が ②ぎょう より先。

よって ④→③→①→② のエが正答。

・ア ③と④の順が逆（「きよう」より「きよい」が先）

・イ ①と③の順が逆（直音が先）

・ウ 清音・濁音、直音・拗音の順がどちらも逆

採点ポイント: 五十音順で決まらないときに、「直音→拗音」「清音→濁音→半濁音」の決まりを使えているか。

2　問7(1)（2点）

ウ

手紙の前文は、「拝啓」などの頭語のあとに、時候の挨拶（季節にふさわしい言葉)、相手の様子をたずねる言葉を続けるのが基本の形。手紙は「十一月の中ごろ」に出すので、晩秋の様子を表す挨拶がふさわしい。

・ア「若葉の緑がまぶしい」→初夏（五月ごろ）
・イ「厳しい残暑」→夏の終わり（八月〜九月ごろ）
・ウ「木々の葉も色づき、朝夕はめっきり冷えこむ」→晩秋（十一月ごろ）✓
・エ「梅のつぼみ」「春の訪れが待たれる」→冬の終わり（二月ごろ）

採点ポイント: 手紙を出す時期（十一月中ごろ）を確かめ、季節を表す言葉（若葉・残暑・色づく木々・梅）から時期を判断できているか。

2　問7(2)（2点）

ア

中村さんは、はじめに「クラス全員の感想をのせてはどうでしょうか」と提案したが、司会の「手紙が長くなりすぎませんか」という指摘を受けて、「木下さんに教えていただいたことにふれた感想を三つほど選んで、のせるのはどうでしょう」と案を改め、具体的に示している。

・ア が正答
・イ 川口さんの下書きの誤りを指摘する発言はない
・ウ 話し合いをまとめて決定しているのは司会である
・エ 中村さんは自分の案にこだわらず、司会の指摘を受け入れて案を改めている

採点ポイント: 中村さんの二つの発言（提案→指摘を受けて修正した提案）の流れをとらえられているか。

3　問1（4点）

エ

①の直後に理由が述べられている。「文章を読んでいる間は、書き手が話の順序を整え、一つ一つの事がらをつなぐ道筋を示してくれている」ので、「自分の頭で道筋をつくり出していなくても、すらすら読めたというだけで、理解したような気持ちになりやすい」。

・ア「内容がやさしすぎて」は本文にない
・イ 友人の質問のしかたを問題にしてはいない
・ウ「すべて暗記できた」は本文にない（暗記してもわかったことにはならないと、第六段落で述べている）
・エ が正答

採点ポイント:「書き手が示した道筋」と「自分でつくる道筋」の対比をとらえられているか。

3　問2（4点）

人に説明する

第四段落の初めに「人に説明するということは、この『自分でハンドルを握る』ことにあたる」とある。助手席に座って道を「見た」だけの状態が、文章をすらすら読めた状態にあたり、自分でハンドルを握って道を「たどれる」状態が、人に説明できる状態にあたる。

・「人に説明する」（六字）が正答

採点ポイント: 第三段落のたとえ（助手席・ハンドル）が、第四段落でどの言葉に置きかえられているかを結びつけられているか。

3　問3（6点）

(例) 自分の理解のつながりがまだできていない場所を、正確に教えてくれる目印になる（37字）

正答例:

・(例1) 自分の理解のつながりがまだできていない場所を、正確に教えてくれる目印になる（37字）

・(例2) 知識どうしのつながりが切れている所を見つけ、学び直すための目印になる（34字）

根拠: ③の直前「説明の途中で言葉に詰まる所は、自分の理解がまだつながっていない場所を正確に教えてくれる目印なのである」と、第四段落「そのつなぎ目がうまくつながっていない所で、言葉は止まってしまう」をあわせてまとめる。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「目印」が使えている	1点	指定語必須
②「つながり」が使えている	1点	指定語必須
③ 理解（知識）のつながりができていない所を示す、という内容	2点	「理解のすき間」等も可
④ それが次に学ぶ（学び直す）手がかりになる、という内容	1点	「正確に教えてくれる」等も可
⑤ 30〜40字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

3　問4（5点）

イ

④の直後に「説明しようとして詰まり、調べ直し、もう一度説明してみる。そのくり返しの中で、知識どうしのつながりは少しずつ太く、確かなものになっていく」とある。

・ア「時間がたてば忘れる」「暗記し直す」は本文にない（暗記をすすめてはいない）

・イ が正答

・ウ「先生に説明してもらう」のではなく、自分で説明することを重んじている

・エ「年齢を重ねれば、自然に」は本文にない

採点ポイント:「くり返しの中で」「少しずつ」という言葉から、わかることを過程としてとらえる筆者の考えを読み取れているか。

3　問5（4点）

ア

この段落は「これは、……に似ている」で始まり、前の段落で述べた「書き手の示す道筋をたどって、わかったと思いこむ」ことを、車の助手席に座って道を覚えたつもりになる、という身近なたとえで言いかえている。そのうえで、次の段落で「人に説明すること」を「自分でハンドルを握る」ことに結びつけている。

・ア が正答

・イ 前の段落と反対の主張を述べてはいない

・ウ 調査の数字は示されていない

・エ 話題を車の運転へ移したのではなく、学ぶことを説明するためのたとえである

採点ポイント:「〜に似ている」という言い方から、たとえによる言いかえの段落だと見抜けているか。

3　問6（5点）

ウ

本文全体の主旨:

・文章をすらすら読めても、書き手の道筋をたどっただけで「わかったつもり」になりやすい

・人に説明することは、知識のつながりを自分でつくる作業であり、詰まる所は理解がつながっていない目印になる

・教科書の文をなぞるのではなく、自分の言葉や身近な例でつながりをつくり直すことが大切

・「わかる」は、詰まり・調べ直し・説明し直すくり返しの中で確かになっていく

・ウ が正答

・ア 筆者は、教科書の文をそのまま口にしても「道筋をなぞっているにすぎない」と述べており、逆

・イ 筆者は、詰まった所から「次の学びが始まる」と述べており、説明をやめることはすすめていない

・エ 文章を読むことが役に立たないとは述べていない

採点ポイント: 「説明すること」「詰まること」「自分の言葉でつくり直すこと」の三つを結びつけて、筆者の結論をとらえられているか。

4　問1（4点）

というもの

語中・語尾のハ行「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す。

・「いふ」の「ふ」→「う」で「いう」

・よって「というもの」

採点ポイント: 「というふもの」「とゆうもの」は不正解。「いう（言う）」は現代仮名遣いでも「いう」と書く。

4　問2（4点）

エ

十二支を時刻に当てはめるときは、午前零時ごろを中心とする二時間を「子」とし、二時間ずつ順に進む。

子（午前零時ごろ）→丑（二時ごろ）→寅（四時ごろ）→卯（六時ごろ）→辰（八時ごろ）→巳（十時ごろ）→午（正午ごろ）→未（午後二時ごろ）→申（四時ごろ）→酉（六時ごろ）→戌（八時ごろ）→亥（十時ごろ）

・戌は十二支の十一番目なので、午後八時ごろ（午後七時〜九時）→エ が正答

・ア 午前四時ごろは寅

・イ 午前八時ごろは辰

・ウ 午後四時ごろは申

採点ポイント: 十二支の順（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）を言えるようにし、「午」が正午（午前・午後の「午」）にあたることを手がかりに数えられているか。

4　問3（4点）

イ

一日を十二に分けるので、一つの時刻は二時間。子（午前零時ごろ）から十二支の順に二時間ずつ進めると、丑（午前二時ごろ）→寅（午前四時ごろ）→卯（午前六時ごろ）となる。

・イ 卯 が正答

・ア 寅は午前四時ごろ

・ウ 辰は午前八時ごろ

・エ 酉は午後六時ごろ（朝と夕方を取りちがえないこと）

採点ポイント: 子を起点に二時間ずつ数えるか、「午＝正午」から六時間（三つ）さかのぼって数えられているか。

4　問4（4点）

(例) 作者たちとの別れをつらく思った（15字）

正答例:

・(例1) 作者たちとの別れをつらく思った（15字）

・(例2) 別れるのがなごりおしかった（13字）

根拠: ③の「別れ難く思ひて」は「別れにくく（つらく）思って」という意味。長年親しくしてきた人々が、任期を終えて京へ帰る作者たちとの別れを惜しみ、一日中あれこれと世話をしながら、夜が更けるまで大声で騒いでいたのである。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
① 別れをつらく思った（惜しんだ）という内容が示されている	3点	「別れたくなかった」「なごりおしかった」等も可
② 現代語として自然で、10〜20字の字数を守っている	1点	古語の残存（「別れ難く」など）・字数逸脱は減点